



福祉見てある記49

東日本大震災・宮城県岩沼市

本研究所研究員 藤本 延啓
(環境社会学)

2011年3月11日14時46分、皆さんはどこで、何をしていらっしゃいましたか。私は当日午前中まで東京にいました。ですが、昼まえの便で羽田を離れ、その時には上勝町という徳島県の山間のまちにいました。全く揺れを感じることはなく、テレビで被災地の映像を見るまで、大地震が起きたことすら気づきませんでした。

その後も九州の熊本に住む私は、水にも電気にも食べ物にも困ることはありませんでした。テレビやインターネットで見る震災の映像は衝撃的ではありましたが、あまりに日常感覚を逸脱していて、どこか現実味がなく、同じ日本で起きている出来事だということを、受け止めきれずにいたように思います。

そういう、東日本大震災が「人ごと」「よそごと」になってしまいそうな自身の感覚を、私はとても恐ろしく感じていました。「これは現地に行くしかない」そう思う一方で、「被災地をただ見に行く」ことに対して強い抵抗を感じ、悶々とする日々が続いていましたが、3ヶ月後の同年6月、津波被災地での片付け作業ボランティアとして現地へ行く機会を個人的につかむことができました。当時、被災地では宿泊もままなりませんでしたが、東京を深夜に発つバスに乗り、丸1日被災地で作業をして、翌朝に東京に戻るという、0泊3日の強行スケジュールでした。

私が作業をさせていただいたお宅は、宮城県岩沼市の沿岸部にある森さんという方のご自宅でした。古くからの農家である森さん宅

は、広大な農地で主にお花を栽培されており、またたくさんの太い柱に支えられた大きな母屋や、先祖から伝わる品々を納めた立派な倉をお持ちでしたが、津波はその全てを奪っていきました。10mを超える高さで家屋敷や農地を襲い、堅牢な母屋と倉は破壊を受けながらもその姿をとどめてはいましたが、屋内は泥で埋まりました。花の栽培に使われていたたくさんのガラス温室はひしゃげた骨組みを残して流出し、農地は海水で満たされ、すべて土を入れ替えなくては農業を再開できない状況になってしまいました。

ボランティアの私たちは必死で作業をしましたが、当然ながら1日でできることはごく限られていました。ひたすら泥を掻き出し、大切そうな物が出てくるたびにご家族に確認し、また泥を掻き出すという作業を続けて行くうちに、日が暮れてきてしまいました。達成感はなくありません。むしろ、このような中途半端な状態で帰ってしまうことに、言いようのない虚しさと申し訳なさを感じました。

私は、これから何度もここを訪れることを決心しました。震災が「人ごと」「よそごと」になってしまいそうな自分自身のために、被災地を身をもって知り、そして熊本の学生たちに伝えていくことが、微力ながら大学教員として果たすことができる役割であろうと思



津波に被災した農地。がれきに埋まっている。

いました。

こうして森さんご一家とのお付き合いが始まりました。震災以降、ご一家がお住まいの岩沼市を中心に、仙台、石巻、女川、陸前高田、宮古、そして福島といった被災地へ毎年足を運ばせていただき、授業で被災地の様子や人びとの話をし、少人数ですが学生を現地へ連れて行くこともできました。

現地に通っていて常に思うのは、「暮らしは続いていく」ということです。一瞬にして奪われたそれまでの「あたりまえの暮らし」。しかし、生き残った人びとの暮らしは、形を変えながらも、やはり続いていく（続いていかざるを得ない）のです。

森さんのご長女、大泉淳子さんは岩沼市で生花店を営みながら、「花セラピスト」の資格を取得され、「被災地におけるフラワーデザイン教室及び地場産品の販売を取り入れた出張サービス」を事業として行う「フォレストガーデン花とも」を起業されました。事業を始めたきっかけとして、大泉さんは次のように述べられています。

震災後、両親をはじめ地域の人々は、自然に囲まれた家から殺風景な仮設住宅へと移ることになりました…中略…花壇植栽のボランティア活動に参加し、改めて、本当にお花の力の素晴らしさに魅了されました。まるで被災者の心に響くひとすじのひかりのように思えました…中略…高齢者を含めた多くの方々に…中略…元気になる活動を手助けしていくという必要性を感じました。東北の人々、みんなの笑顔が見たいから、被災地のどこへでも足を運び、人と人とを花で繋いで、「心の復興」を目指したいと気持ちを強く致しました。

(ウェブサイト「みちのく起業」より引用)



大泉淳子さんの生花店にて。
ご両親である森さん夫妻、ご友人と私

去る10月18日、社会福祉研究所研究会の講師として、大泉さんを熊本学園大学にお招きすることができました。研究会では、震災におけるご自身の体験をご講演いただくと共に、「花セラピー」を参加者に体験してもらうワークショップを開催しました。参加者たちの花を生ける真剣なまなざし、それぞれが生けた花について語り合うときの笑顔…、大泉さんのおっしゃる「お花の力」を実感するすばらしいひとときでした。

「福祉」を辞書でひくと、「幸福。特に、社会の構成員に等しくもたらされるべき幸福」と書かれています(大辞林 第三版)。東日本大震災を通して、私たちは「福祉」、つまりは「幸福」について大きな問いを突きつけられました。大泉さんの「被災者の心に響くひとすじのひかり」「『心の復興』を目指したい」という言葉には、「続いていく暮らし」に人びとが求めているものが強く顕れています。2011年3月11日、私たちはその時に起きたことのみならず、「続いていく暮らし」における「福祉」にこそ目を向けなければなりません。それがすなわち、「震災を忘れない」「震災の教訓を活かす」ということなのだろうと、私は思います。